

明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

最終回

【学生の目】

その日は1日、自由が丘を踏査する予定で外出していた。夕方、休憩できる場所を探していたところ、写真の通りに出た。九品仏川緑道は1974（昭和49）年に

地域価値を生むパブリックスペース

目黒区と世田谷区の間を流れる九品仏川を暗渠（あんきょ）化して造られた。9体の阿弥陀如来像「九品仏」で有名な浄真寺（世田谷区）から、大井町線の「緑が丘」駅まで東西約1.6キロで、住宅街の駅として高い人気の「自由が丘」駅（東急東横線と大井町線）の近くを通る。



五十嵐 実菜
不動産学部4年

自由が丘散策の印象は、「建物が隙間なく立ち並び、細い路地が多い」だった。しかし、踏切を超え、車の多い路地を抜けると、急に視界が開ける。建物の高さや緑道の幅の関係が程よい、明るい色の御影石で仕上げた歩道と車道に高低差がない、電柱や看板が目につかないほか、街路灯、木製ベンチ、街路樹が並び、オーブンテラスの飲食店も展開されている。車が少ない静寂感もあり、読書

交流する仕掛けなど「情緒」が重要だ。九品仏川緑道には「情緒」があり、筆者のような偶然の来街者よりも、生活の一部として継続利用する人が多いように見えた。戦後の闇市撤廃や学生運動の混乱、交通渋滞などの懸念から日本では道路の利用目的を交通に限定し、人が交流するパブリックスペースと位置付けることは少なかった。しかし、その役割が見直されている。魅力的な例は東京ミッドタウン日比谷である。日比谷仲通りは歩行者専用道路化され、道路が広場に姿を変え

“情緒”が人々の愛着生む

に没頭する、散歩する、飲食を楽しむなど、思い思いに憩いの時を過ごす。心地の良い歩車共存空間は、「街の中の居間」のようだ。世田谷区のHPは、「緑道は自然を取り戻し、歩行者の安全と緊急避難通路の確保などを目的」とするが、今後のパブリックスペースは、「機能」だけでなく物足りない。再訪したくなる空間の魅力や日常的に人々が

た。同開発では日比谷公園、日比谷通り、建物上階にあるパークビューガーデンまで緑が連鎖する仕組みがつくられた。九品仏川緑道とも通じる「情緒」と人の交流がある。パブリックスペースは地域に付加価値を与え、都市全体のイメージアップにつながる。「情緒」あるパブリックスペースの日常的な利用は、人々の心を豊かにしてシティブ



九品仏川緑道は心地良い歩車共存空間に

ライドを生む。人々の愛着が地域創生の鍵である。

参考文献＝緑道とは（世田谷区ホームページ）、一本の緑道も周辺環境により異なる使われ方！～自由が丘の緑道を踏破して考える～（フットパス）、国土交通省「ニューノーマル時代に重要となるパブリックスペースのあ

【教員のコメント】

海外では中心市街地を歩行者空間にする、道路のレストランを目玉にするなど、人の活動を主役にして地域価値と都市の魅力をつくる。今夏、大勢が繰り出してにぎわいを生んだ夏祭りみる日本の道路文化を普遍化する英断が人と街の未来につながる。

（終わり）